

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 95 回 「襲名」は「継歴計新」～新時代への「ときめき」である！

噺家^{はなしか}の林家こぶ平が、「九代目正蔵」を襲名することになり、話題となった。そのニュースを伝える過程で「止め名^{とめな}」という言葉が良く使われていた。落語界で一門の最高位の名前を意味し、林家一門の大看板、大名跡を継いだということである。

ちなみに三笑亭^{さんしやうてい}はプロ落語家の祖「可楽^{からく}」、三遊亭^{さんゆうてい}は「圓生^{えんしやう}」、柳家^{やなぎや}「小さん^{こさん}」、桂^{かつら}「文楽^{ぶんらく}」あるいは「文治^{ぶんじ}」、上方桂^{あべの}は「文枝^{ぶんし}」、古今亭^{ここんてい}は「志ん生^{しんしやう}」、笑福亭^{しやうふくてい}は「松鶴^{しょうかく}」ということになるか。ついでに、「四代目松鶴」の弟子が「笑福亭松の助^{しょうふくていしょうかくすけ}」(本名・明石^{あかし}さん)その弟子が「明石家さんま^{あかしやさんま}」、「さだまさし」なるフォークシンガーは「四代目三遊亭圓歌^{しやうゆうていえんか}」の不肖なる(?)弟子だったということ...どうでもいいのだが、ご存知だったでしょうか？

本来この「止め名」、大相撲の四股名で、二度と使われないことになっているものを言った。野球の永久欠番のようなものであろうか。「谷風」「雷電」「不知火」「常陸山」「双葉山」などいくつか存在する。これらは、現役力士の四股名には、基本的に二度と使われないことになっているが、落語や歌舞伎の大名跡は、それにふさわしい技量と人格が伴えば、襲名していくしきたりである。

最近この「大看板・大名跡」が、着々と復活しているのは、うれしい限りである。

ついこの間も、歌舞伎の中村勘九郎が「十八代目中村勘三郎」を襲名した。また、上方歌舞伎の中村雁治郎が、何と 230 年ぶりに「四代目坂田藤十郎」を復活させ、息子は父の「雁治郎」を四代目として継ぐことになった。

平成の三之助といわれた、菊之助は「七代目尾上菊五郎」、辰之助は「四代目尾上松緑」、新之助は「十一代目市川海老蔵」をそれぞれ襲名した。少し前の十五代目片岡仁左衛門の誕生以来、歌舞伎界は襲名ラッシュで、大看板が出揃った感がある。

更に、能楽の世界では、野村与十郎が和泉流狂言方宗家の「九世野村万蔵」を襲名し、久々の大名跡が復活している。平成 14 年だが、十四代目今泉今右衛門が誕生し、最近ではサル芝居軍団のチビ次郎が「三代目次郎」を襲名するに当たっては、何とも微笑ましい。

それぞれ興行を控え、営業的にそれなりの思惑はあると思われるが、小生「襲名」は大好きである。歴史と伝統を引き継ぎ、その環境の中で新たな時代への挑戦を繰り返す。それが「代々」と伝承され、時代に見合った新たな「文化」を創り出す...そんなイメージが「襲名」という言葉にぴったりだ。

これは正に「継歴計新^{けいれきけいしん}」、古きよき歴史を継ぎ、時代にあった新たなものを計画していく...芸能や文化に限らず、我々中小企業経営のフィールドでも、今、この時代に最も必要な考え方の一つといえよう。「継歴計新」、新時代への大いなる「ときめき」を感じる。